

カント可感界・可想界および沈黙十年の解明

森 哲彦

はじめに

カントは、前批判期の著作『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』(1766年、以下『視霊者の夢』と略す)⁽¹⁾において、二つの世界概念が存在するとする。それは一方の「物体的存在者が物質的世界」(II327) 可感界であり、他方の非物質的存在者が「非物質的世界、可想界」(ibid.)である。その際カントは、これら世界の説明原理にとり「経験と常識」(II368)と「人間理性」(II369)が重要であるとす。そして「最後に合流する」(ibid.) それらが「真の知恵」(II372)である。しかしここで「真の知恵は、単純さの侍女である」(ibid.) とするだけである。だがそれだけでは、真の知恵は、世界説明原理の明証性を欠くものとなる。それゆえ「可想界」は「蓋然的に過ぎないとも推論され」(II333)、「明証性からほど遠い」(II334)ものとなる。つまりカントはそこでは非物質的世界と物質的世界を区別して説明する形式的原理が未だ見出されていないことを示している。そこでこの形式的原理を解明することが『可感界と可想界の形式と原理について』(1770年、以下『可感界と可想界』と略す)⁽²⁾の課題となる。そしてその後カントは、ヘルツ(M.Herz)宛の書簡(1781年5月1日付)⁽³⁾で『純粹理性批判』(1781,1787年)⁽⁴⁾は「かつて『可感界と可想界』という標題の下でわれわれと一緒に論究した諸概念から始まる、あらゆる多様な研究の成果を含んでいる」(X266)と記している。そしてシュルツ(U.Schulz)は「この論文のねらいは、形而上学が自己矛盾の袋小路に迷い込んだのは、なぜであるかを批判的に示し、その上で形而上学が、新しい、学問的に確かめられた基礎を与える」⁽⁵⁾と高く評価する。このように『可感界と可想界』の言明は、前批判期として重い意味を持つと言ってよいであろう。本論文は、1 可感界と可想界の解明では、確かに可感界での形式的原理の明証性は確立されるものとなるが、一方可想界の形式的原理は未解決となっていることを明らかにする。次に2 沈黙十年の解明では、この可想界での形式的原理が、1771年から批判期『純粹理性批判』への道を書簡集において明示していることを明らかにする。本論文は、これらの問題の解明方法に、精神史的解釈⁽⁶⁾を行なうものとする。

1 可感界と可想界の解明

さてカントは『視霊者の夢』において、非物質的世界の「魂という実体は、空間が占めている」(II323) つまり空間は客体であるとし、可想界に空間の存在を認識している。さらにカントは、この空間概念について論文『空間における方位の決定の区別の第一根拠について』(1768年)⁽⁷⁾でも、ニュートン (I.Newton) のいう「絶対的空間 (absoluter Raum)」(II378) を未だ承認している。つまり「絶対的空間は、すべての物質の現存在 (Dasein) から独立であり...それ自身の実在性 (Realität) を有するという証明である」(ibid.) とする。従ってカントは、空間は非物質的世界に妥当する、と考えていたのである。しかしそのことによっては、絶対的空間による可想界説明の明証性は得られない、と考えるようになった。そこでカントは、空間概念自体を主観的空間概念に、変更するものとなる。そのためカントは、ヘルダー (J.G.Herder) 宛の書簡(1768年5月9日付)⁽⁸⁾ で「私もしくは他者の諸見解に対して、まったく虚心坦懐に構造全体をよく引っくり返して見たり、すべての見地から考察」(X74) して見た、とする。そしてこの教説問題についてカントは「69年の大いなる光」について、1776当時の「手記断章(Reflexion)」⁽⁹⁾で、次のような確信に至る。「私は、初めのうちは、この教説をぼんやりと見ていた」(XVIII69, R, 5037)。つまりカントは感性的世界を説明する形式的原理の明証性を薄明りの中に見ていた、というのである。そしてカントは「この点を片付けてしまうまでは、この学問の研究を延期しなければならないと確信する」(ibid.)。そこでこの問題について「私は命題とその反対命題を真剣に解決しようと試みた」(ibid.)とする。つまり感性的と知性的の二つの世界認識の区別説明の形式的原理を全く本気で考えようとしたのである。そしてそれまで「私は知性に幻想を推論していた」(ibid.)と告白する。つまりカントは、知性の形式的原理によってマルブランシュ (N.Malebranche) のいうように「我々は全てのものを神において見る (Quenous voyons toutes choses en Dieu)」⁽¹⁰⁾と推論していたのである。それゆえカントは、まだ知性がすべての世界認識を可能とする幻想、つまり「まどろみ」を有していたのである。しかしここに至り「その知性の幻想 (Illusion des Verstandes) が、どこに潜んでいるかを発見する」(ibid.)に至る。この発見こそが、知性的認識に対する感性的認識の確立である。そしてこれらの形式的原理を発見する「69年が私に大いなる光を与えた (Das Jahr 69 gab mir grosses Licht)」(ibid.) とする。つまり時空という主観的な感性的認識は、可

想界の認識に関与しない座標軸という新たな「光」を意味する。この発見によりカントは「知性の幻想」という「まどろみ」から感性的認識の自覚に至る。そしてこの自覚を論述した論文が『可感界と可想界』である。その標題に含まれる「形式」と「原理」は、可感界では事象の同位的関係と感性を、可想界では存在者の同位的関係と知性を表すものとなる。このようにしてカントは、可感界での感性的認識の形式的原理の確立により、一つの批判的形而上学に至るのである。

さてカントは、二世界論的構想について、すでに『視靈者の夢』において「人間の魂は、この世界においては同時に二つの世界と結びついている」(II 332) としている。そしてこの二世界観に基づき『可感界と可想界』では、世界概念の解明において「私は精神(mens)の本性からその〔世界〕概念の二重性」(II 387) を顧慮することは、さらに「形而上学(metaphysica)における方法」(ibid.) に役立つとする。つまり「与えられた部分から全体の合成を知性の抽象的概念において考えることと、この一般的概念を、感性的認識能力によって追求すること...とは別である」(ibid.)。それゆえ精神の本性は、知性的と感性的認識の二重性に成立するものとなる。次いでカントは、二世界観を「質料」、「形式」および「総括性」の三契機を論理学の手法を用いて明らかにする。まず「質料(momentum)」とは「個々の実体(substantia)と見なされている諸部分」(II389) すなわち「理性の諸法則によって生じる問題」(ibid.) を意味する。次に「形式(forma)」とは、事象の「相互に連結される同位的関係(coordinatio)」(II 390) を意味する。それは総合的關係を示すものであって「従属的關係」つまり「結果と原因」の關係を示すものではない。また「すべての世界には、その本性に属する恒常的、不変的な形式がある」(ibid.)。つまり直観に基づく形式的原理としての「空間と時間 (spatium et tempus) の概念は、理性的で客観的な概念でなく、現象であって普遍的結合をもたらす共通の原理」(II391) である。さらに「総括性 (universitas)」とは「同位的部分の絶対的総体性」(ibid.) を指す。そこでは「何であれ全体に対し、相互に同位的部分として關係するすべてのものは、統一して定立されるもの」(ibid.)となる。このようにして二世界のうち可感界は、直観による時空の形式から構成される現象界であり、可想界は「單純なもの」という「原因〔神〕」(II398) から統制される抽象界を意味するものとなるのである。

さらにカントは、このような可感界と可想界を区別する形式的原理として、感性と知性の二元性を次のように定義する。まず「感性 (sensualitas) とは、主観の受容性で

あり、自己の表象状態が、ある対象の現前 (praesentia) により、一定の仕方では触発されることによって可能となる」(II392) ものである。一方「知性 (理性) (intelligentia (rationalitas)) とは、主観の能力であり、その性質上自己の感官の中に達しえないものを、それによって表象することができる」(ibid.) ものである。従ってカントの「ライプニッツ (G.W.Leibnitz) とプラトン (Platon) による比較が示すように」⁽¹¹⁾、「感性的対象は、可感的であり」(II392) 古代人の諸学派では「フェノメノン (現象体 phenomenon)」とされ、知性の対象は「可想的であり」、「ヌーメノン (可想体 noumenon)」とされる。そして双方の認識の二元的区別について「感性的認識は、現象する通りの物の表象であり、それに対して知性的認識は、存在する通りの物の表象である」(ibid.) という二元論を導入する。さらに知性的認識は、形而上学の問題を明確にするために、論理的と実在的の二重の使用に区別される必要があることを説明する。まず知性の「論理的使用」は「上位概念が下位概念の下に従属的に秩序づけられ、矛盾律に従って相互の間で比較される」(II 393)。そして「比較することで得られる反省的認識は、経験 (experientia) と呼ばれる」(II394)。それゆえ知性の「論理的使用」の認識は「常に感性的と見なされるべき」(II393) とする。これに対して知性の「実在的使用」は「物や関係の概念そのものが与えられる」(ibid.)。そして「知性的概念はすべての感性的なものを捨象する(abstraho)」(II394) ので、そのような知性的概念は「純粋概念」(ibid.)と名づけられる。これらのことから知性の「論理的使用」は、感性的なものを含むので、そのような知性的認識を「判明なものとして説明するのは不当だということが分かる」(ibid.)。それゆえカントは、この知性的であっても極端に混雑していることがあるという事態を「すべての知性的認識の機関たる形而上学において、我々は気づくところである」(II395) とする。つまりここでは感性的認識と知性的認識の原理的区別が必要なことを説明している。そこでカントは論理的でなく「実在的使用」に基づく「純粋知性(intellectus purus) の使用の第一原理を含む哲学が、形而上学である」(ibid.) とする。ただし既述の「感性的認識と知性的認識との区別を説く学問は、形而上学への予備学」(ibid.)に過ぎない。ここでは「予備学」でなく、さらに形式的原理を示す本来的な形而上学が問題である。もちろんこのような「形而上学には、経験的原理は見出されない」(ibid.)。それゆえ経験を「捨象する概念」(II394) としての純粋知性の本性は、もちろん曖昧な「生得的概念(conceptus connatus)になく」(II395)「法則から抽象された概念」(ibid.)にある。かかる概念としては「可能性、存在 (exsistentia)、必然性、実体およ

び原因等」(ibid.)が挙げられる。従ってそれら諸概念は「いかなる感性的表象の中にも決して部分として入り込まない」(ibid.)ものである。

さらにカントは、知性的認識の働きを明確化するため、その概念を吟味的と定説的の、二つの目的に区分する。第一の「吟味的 (elenchiticus)」目的では、知性的概念が「感性的なものを可想界から遠ざける」(ibid.)のに役立つ。第二の「定説的 (dogmaticus)」目的では純粋知性によってのみとらえられる「共通の尺度」(II396)が「可想的完全性 (perfectio noumenon)」(ibid.)を意味し、その完全性が可想界を規定する。その際、この「可想的完全性」には、理論的と実践的の、二つの意味があるとする。まず「理論的意味ではこの完全性は、最高存在者である神 (deus) であり、実践的意味では道徳的完全性 (perfectio moralis) である」(ibid.)。また「ある任意の完全性」の「最大は今日では理想と呼ばれ、プラトンにおいてはアイデア (idea) (共和国のアイデアのように) と呼ばれる」(ibid.)。カントによれば、プラトンにとっては、このアイデアが完全性の「すべてのもの (omnium) の原理」(ibid.)を示すものとなる。しかしカントでは、可想界を純粋知性でとらえる「完全性」が形式的原理である。つまりカントによれば、プラトンはアイデアが原理を示すが、カントにとっては原理が可想界をとらえる、というものである。そしてカントによればこの「完全性」は理論的意味としては「神が認識の原理 (principium cognoscendi)」(ibid.)であり、実践的意味としては「道徳的完全性」であり「すべての完全性の生成の原理 (principium fiendi)」(ibid.)である、とする。従って道徳哲学は、純粋知性によってのみ認識されるもの、となる。

またカントは可感界と可想界を区別する形式的原理として「直観」を、次のように規定する。まず可想界における「知性的直観 (intuitus) は(人間にとっては)存在せず、象徴的認識でしかない。そして知性的認識」(ibid.)は「普遍的概念によって抽象的に (abstracto) 可能であり、個別的概念によって具体的に (concreto) 可能なものではない」(ibid.)。一方、可感界において可能となる「人間的直観の形式的原理(空間と時間)」(ibid.)は「人間の感官の対象たりうる条件であるので、感性的認識の条件である以上、知性的認識の手段ではない」(ibid.)。そして「人間的精神の直観は、受動的で、或るものが人間の感官を触発する限りでのみ、可能である」(II396-397)。それゆえ人間的直観のための「空間と時間の概念は、何らかの結合の理性的で、客観的な観念ではなく」(II391)「主観的原理 (principium subjectivum) だけを認める」(II 398)。従ってそれら時空の概念は、感性的認識のア・プリオリな主観的条件を意味するものとなる。

それに反して知性的直観としての「神的直観は、独立的であるため、原型であり、それゆえに完全に知性的である」(II397)ので「客観的原理 (principium objectivum)」(II398)を意味するもの、となる。

さて可感界での「空間と時間の概念は、質に関して、いかなる可感的なものをも規定しないので、量に関してのみ学の対象」(II397)となる。この学が「可感界の形式の原理」(II398)である。そして本来「宇宙〔世界〕の形式の原理は、普遍的結合の根拠を含む」(ibid.)のものである。それゆえ「可感界の形式の原理は、現象である限りでのすべての物の普遍的結合の根拠を含む」(ibid.)。それゆえ「世界は形式の主観的原理だけを認める」(ibid.)。その主観的原理は「心 (anima) のある特定の法則」(ibid.)である。つまり「現象の宇宙の絶対的に第一の包括的なこれらの形式的原理」(ibid.)には「時間と空間の二つ」(ibid.)が「人間的認識の図式と条件 (schema et condicio)」(ibid.)を構成する。一方「可想界の形式は、客観的原理、すなわちそれによって存在者それ自身の結合が成り立つ原因〔神〕を認める」(II398)ものである。

では時間と空間という「感性的認識の二つの原理」(II405)の特質とは何か。まず1「時間の概念は、感官から生じるのではなく、感官に対して前提されている」(II398)こと。2「時間の概念は、個別的であって一般的でない」(II399)こと。3 時間の概念は「感覚的直観ではなくて、純粹直観である」(ibid.)こと。4 時間の概念は、質ではなく「連続の量であり、宇宙の変化における連続の法則の原理である」(ibid.)こと。5 従って時間は、ニュートンのいう絶対的なものでなく、それゆえ「何か客観的なもの、実在的 (realis) なものでなく」(II400)、「人間精神の本性による必然的な主観的条件 (subjectivis condicio)」(ibid.)であること。6 しかし「時間は、それ自身として絶対的に措定されれば、想像的なものであるが、時間が可感的なもの」(II401)に属する限りでは「直観的表象の条件」(ibid.)であること。7 従って「時間は、可感界の絶対的に第一の形式的原理」(II402)なのである。

次に「空間の概念は、外的感覚から抽象されるのではない」(ibid.)。つまり「空間の概念は、すべてのものを自らのうちに包括する個別的表象であって」(ibid.)、「共通概念ではない」(ibid.)。かくして「空間の概念は、純粹直観である」(ibid.)。また「空間は、何か客観的なもの、実在的なものではない」(II403)。従ってニュートンの言う「絶対的空間」概念は否定され、またライブニッツのように「空間は、存在 (exsistentia) するものの関係それ自体」ではなく、それゆえ「主観的なもの、観念的なもの」(ibid.)

である。このようにして時間と空間の特質は「知性的認識におけるように、一般的概念でなく、個別的な、しかも純粹直観」(II405)なのである。

次に「可想界の形式と原理についての問題」は「すべての実体の関係そのものは、如何なる原理に基づくのか」(II407)ということである。つまり問題の核心は「多くの実体が相互(commercium)作用の関係にあるのは、如何にして可能か」(II407)である。換言すれば、ここでは「実体の形式に関して」、「そもそも如何にして、すべての実体の間に全体性が存在するのかを考察する」(ibid.) ことである。しかし「実体の可能的な相互作用の原理は、実体が存在することだけで成立するのではない」(ibid.)。そこには「依存(respectus)関係」(ibid.)が必要となる。しかしもし「実体の間に相互作用があるとするとするなら」(ibid.)そこには「特種の根拠を必要」(ibid.)とする説が他にある。カントはそのような「通俗の意味における物理的影響説の第一の誤った命題」(ibid.)は、結局のところ「すべての哲学体系を無視する」(ibid.)とする。それゆえ物理的影響説による「必然的実体からなる全体は、不可能」(ibid.)となる。従って必然的でなく、依存関係をもつ「実体の全体は、偶然的な全体であって、世界はその本質からして偶然的なもの(contingentia)からなる」(II408)。それゆえ「世界の实体は、自分以外の存在者に依存する存在者であるが、種々異なった存在者ではなく、唯一の存在者に依存する」(ibid.)ものである。従って「宇宙の実体の連関における統一は、すべての実体の存在者への依存の帰結である」(ibid.)。このような可想界での実体の存在者への依存関係は、すでに『形而上学的認識の第一原理の新解明』(1755年、以下『新解明』と略す)⁽¹²⁾の「共存の原理(principium coexistentiae)」(I412)ですで見られる。カントによれば『新解明』では「諸実体は、自分自身の存在によるだけでは、如何なる相互関係ももたない。それゆえそれらはそれらの存在の共通の原理、すなわち神の知性によって...相互関係に立つ」(I412f)とする。カントは、実体の唯一の存在者への依存を1770年当時の15年前から、神に定めているのである。このようにしてカントは「神の知性」(II413)という「共通の原因に基づく、実体の存続そのものから生じる調和」(II409)を「一般的に確立された調和」(ibid.)であるとする。従ってカントは、ライプニッツの観念的な「予定調和」説⁽¹³⁾(II409)やマルブランシュのいう神の「機縁」による「機会原因論」⁽¹⁴⁾(ibid.)に対し、カント自身の実在的な普遍調和説を明かにしようとするのである。

次にカントは「形而上学の方法」を以下のように確立する。すでにカントは「形而

上学における方法」(II387)のために「精神の本性からの〔世界〕概念の二重性」(ibid.)つまり知性的認識に対する感性的認識の確立を考えていた。そして「ここでは方法がすべての学問に先行する (methodus antevertit omnem scientiam)」(II411)。それにもかかわらず、これら方法の「研究に着目しない人々は、空間と時間の概念によって欺かれる」(II391)とする。つまりこれら「空間と時間の概念」は「現象である」(II391)。にもかかわらず人はそれを「理性的で何らかの結合の客観的な概念」(ibid.)と取り違えることにより「感性の越権」を承認することになる。そこでカントは、誤解をまねかないため「感性的なもの」と知性的なものに関する形而上学の方法のすべては、次の規則に帰着するとする。つまり感性的認識の固有の原理が、自己の限界を越えて、知性的なものに影響を与えないように細心の注意を払うべき (II411)であるとする。そのためカントはこの「感性の越権」という「窃取的公理」を防止する必要がある、とする。では「窃取的公理」の内実は何か。まず「感性的概念が知性的徴表であるかのごとく偽装する知性の欺瞞は (...類推によれば) 窃取の誤謬といわれる。それゆえ知性的概念と感性的概念のすりかえ (permutatio) は、窃取の誤謬 (...知性化された現象) であろう」(II412)とする。さらに「知性的概念に感性的なものが、必然的に付着しているものと推称するような、雑種の公理を、私〔カント〕は窃取的公理 (axioma subrepticium) と呼ぶ。そしてこれらの不正な公理から、今やすべての形而上学へとひどく広がって行った知性を欺く原理が生じたのである」(ibid.)。この「窃取的公理」に対し、形而上学を救う道としての「還元原理 (principium reductionis) は、次のようである。もし何らかの知性的概念について、空間と時間の関係に属する何かが普遍的に述定されるなら、それは客観的に述定されてはならず、それは与えられた概念が感性的に認識されるための必要条件に過ぎない」(II412f.)。つまり空間時間という感性的認識を「雑種の公理」(II412)によって知性界に持ち込んではいならないのである。従ってカントは、感性的認識を可想界から可感界へ還元することにより「窃取的公理」の不正を正そうとするのである。

さらにこの「窃取的公理」について、カントは三種類の一般的定式を挙げ、二つの二律背反を含む問題点を説明する。カントによれば「窃取的公理」の第一種の一般的定式は、対象の直観〔時間空間〕が可能な同一の感性的条件 (II413) を「対象の可能性そのものの条件」(ibid.) と思いつくことの「すりかえ」である。それは例えば、神として「存在するすべてのものは、いつかどこかに存在する」(ibid.) というように、

場所的な感性的条件の下で、神の認識が可能であるとする「すりかえ」である。それゆえ「物体的世界における非物質的なものの現前 (presentia) は、潜在的であって場所的ではない」(II414)。にもかかわらず、論争者達は「神の現前を場所的なものと空想する」(ibid.)という二律背反に陥る。第二は「感性的所与の比較において成立する感性的条件」を「その対象の可能性そのものの条件」(II413)と思い込むことの「すりかえ」である。それは例えば「精神が一定の場合、知性的概念〔神〕に到達しようとする〔他方で〕精神を制約している感性的条件によって知性に重圧をかける」(II415)という先入観である。そしてこの先入観は「量と質の認識」(ibid.)に関わる問題である。先入観の後者「質」の概念は、可能なもの、実在性、完全性と等置されるものである。しかし先入観の前者「量」は、まず「純粹知性の法則に従えば、任意の因果系列はその始源〔神〕をもつ」(ibid.)。しかしそれは「感性的法則に従えば、同位的に関係づけられたものの任意の系列は指定されうるその始点〔経験〕をもつ。これらの命題は、その後者については系列の可能性を、前者は全体の依存性を含むが、それらが誤って同一の命題と見なされる」(ibid.)。この思い込みにより、感性的条件として主観的原理が可想界へと越権するという二律背反が、成立するものとなる。さらに第三は、二律背反を指すものではないが「すりかえ」として「対象が与えられた知性概念の下に、同一の感性的条件が包摂されうる」(II413)という思い込みである。それゆえ第三の先入観は、主観的原理により「知性的概念への道が開けている」(II417)のではない。それは逆に「経験によって与えられた事例へ、知性的概念が適用され得る」(ibid.)という思い込みである。この差し替えられた「窃取の公理は知性の貧困から生じる」(ibid.)というものである。このように第一、第二種の「窃取の公理」は「感性的越権」から、第三は「知性の貧困」から生じるものとなる。

なおカントは『可感界と可想界』を送呈したランベルト (J.H.Lambert) 宛の書簡(1770年9月2日付)⁽¹⁵⁾でも「感性的の最も普遍的な法則が、元来、純粹理性の諸概念と諸原則だけが問題とされるはずの形而上学において、誤って大きな役割を演じている」(X98)とし「そこにおいて感性的の諸原理に対し、その妥当性と限界が規定されることになる」(ibid.)と記している。かくしてカントは、可感界を説明する主観的原理としての感性的概念の明証性を確立するものとなる。しかし可想界を説明する客観的原理としての知性的概念の明証性の確立は、未解決となっている。この事態についてカントは、後年のベルヌーイ (J.J.Bernoulli)宛の書簡(1781年11月16日付)⁽¹⁶⁾で「1770年...

われわれの認識の知性的なものの源泉が、私にとって新たな、そして予想しなかった困難となった」(X227)としている。

2 沈黙十年の解明

カントは『可感界と可想界』1770年以降『純粹理性批判』に至るまで「夏学期講義計画」を述べた論文の『さまざまな人種について』(1775年)⁽¹⁷⁾を例外として注目すべき仕事をしていない時期があった。これに対し、カント宛の書簡(1774年2月8日付)⁽¹⁸⁾で神学者ラーヴェター(J.C.Lavater)は「この新しい時代になぜ沈黙しているのか」(X147)と非難する。事実カントが『純粹理性批判』の完成に至るまでの時期は、研究上「沈黙の十年」と称されている。しかしこの期間にカントの哲学的思索は『純粹理性批判』への刊行に向けて深められるのである。本節は、この時期、可想界での形式的原理の哲学的思索を書簡集によって解明する。

カントは1770年での「可想界」考察で未解決だった知性的概念の明証性について、ヘルツ宛の書簡(1774年6月7日付)⁽¹⁹⁾で次のようにいう。つまりメンデルスゾーン(M.Mendelssohn)は書簡(1770年12月25日付)⁽²⁰⁾で『可感界と可想界』について「時間が単に主観的なものとするに承服できない」(X155)と反論を加えた。これに対し、カントは「自分の判断」を「納得してもらうことができないこと」(X122)は「私の理論に少なくとも判明性、明証性、あるいはより本質的なものにおいて欠ける点がある証拠である」(ibid.)とする。そしてその際、カントは「感性(Sinnlichkeit)だけでなく、悟性(Verstand)という人間の精神能力(Seelekräft)の主観的原理(subjectivische Prinzipien)に基づくものを、直接対象に関係するものから区別するという確実で明瞭な洞察が、哲学全体に対して、どれほど重要な影響があるか」(ibid.)を問う。それゆえカントは「感性と理性(Vernunft)との限界という標題の下に感性界に対して規定される根本概念と法則の関係」(X123)についての著作を仕上げるとまでする。つまりカントは、可感界での形式的原理である感性と悟性を、主観的原理に基づかせることにより、可想界という対象から区別し、可想界の形式的原理として「理性」という認識能力を、新たに承認しようとして、従来の自己の思考の枠組を変更するに至るのである。

さらにカントは、ヘルツ宛の書簡(1772年2月21日付)⁽²¹⁾で、先の直前の1771年2月21日付での彼宛の書簡と同様に「感性と理性との限界ともいうべき標題」(X129)

をもつ「著作⁽²²⁾の計画を立てた」(ibid.)とする。そして「その著作は、理論的部門と実践的部門という二部構成になる」(ibid.)とする。その二部の相互関係について考え尽した結果、カントは「私のやり方では、まだ何か本質的なものが欠けており、それは私が長い間の形而上学的研究において、他の人々と同じように見過ごしてきたものであり、しかもそれは事実上これまでにそれ自体隠されたものである形而上学のすべての秘密を解く鍵となるものであることに気がついた」(X130)と告白している。ではカントのいう「形而上学の秘密の鍵」とは何か。それは「形而上学が教えるア・プリアオリな認識」(XVII564, R, 4473)のための感性、悟性および理性についての問題である。つまりそれは「われわれの内部で表象 (Vorstellung) と呼ばれているものが、対象 (Gegenstand) に関係するには、どのような根拠に基づくのか」(X130)という問題である。まずその根拠のうち、感性については「表象が単に主観がどのように対象から触発されるのかという仕方」(ibid.)である。その仕方は、表象が対象に対して受動的、感性的であり、それは感性的認識、人間的認識を指している。次に「人間はすべての経験なしに、単なる理性によって何を認識しうるのか」(XVII558, R, 4455)の仕方の問題がある。その理性については「対象すらも表象によって産出される」。その関係の仕方は「表象が客体〔対象〕に関して、能動的であり」(ibid.)、それは「神の認識」を指している。一方、悟性〔知性〕には、表象による対象の原因でもなく、対象が表象の原因であるという関係も存しない。「それゆえ純粋悟性概念は、感官の感覚から抽出されたり」(ibid.)、「客体によって引き起こされたりするものではなく」(ibid.)「魂 (Seele) の本性の中に、その起源を持たなければならない」(ibid.)ものである。この悟性概念に対し、かつてカントは『可感界と可想界』では「知性的表象を単に消極的に表現することで」(ibid.)満足していた。そしてそこでは「何らかの仕方で触発されることなしに、対象と関係するような表象がいかにして可能なのか」(ibid.)を不問にしていた、とする。今やカントは、悟性は人間的認識の仕方と構造によるものである、としているのである。

その際、純粋悟性概念の性質について、カントは「プラトンは、純粋悟性概念を前世で、精神が神を直観したこと」(X131)に求め「マルブランシュは、こうした根源的存在者を、今なお永続的に直観し続けていると考えた」(ibid.)とする。そしてカントは前者を「超自然的影響、後者を知的予定調和と呼び」(ibid.)いずれも「機械仕掛けの神」(X131)とする。それゆえそれらは「我々の認識の根源と妥当性の規定において」、

「不合理であり」、「不利益をもつ」(X131) と批判する。さらに思索を進めるカントは、悟性概念なくしては「形而上学の本性ならびに限界が規定しえないところの、知的認識の源泉を求めた。こうすることによって私は、この学を本質的に異なった部門へ区分し、超越論的 (transzendental) 哲学を追求し、まったく純粋な理性のすべての概念を一定の数へ、カテゴリー (Kategorie) 化しようとした」(X131f.) とする。「ただしそれ〔区分〕は、アリストテレスのというような仕方⁽²³⁾で、10個の賓位語へと単に偶然的に並列したのではなく、すべての概念それ自身が悟性の統一的な少数の原則によっておのずから分類される」(X132) 仕方によってである。この規定により、カントは「自分の意図の本質的なものに関しては、成功している」(ibid.) とする。そして今や「理論的認識と知的である限りでの実践的認識の本質を含むような純粋理性の批判を提示できる」(X132) とするのである。

かくしてカントは、理性認識の仕方について、約20ヶ月後のヘルツ宛の書簡(1773年末頃)⁽²⁴⁾で「私はきわめて長い間、哲学界の半数ほどの人々が無駄に行ってきた学〔形而上学〕を改造しようと意図してきた。そしてその意図の下で、これまでの謎を完全に解き明かす教説を、自らを孤立無援に追い込んでいた理性の仕方を確実に、しかも適用の容易な規則の下にもたらされるような教説を、自分が所有し」(X144) 成功しているとする。この教説こそ『純粋理性批判』である。そこでカントは「まったく新たに学を理念に従って計画し、そして同時にそれを完全に遂行しようという試みを行った人が多くあるとは思わない」(X144) とする。そしてこれまでとは違ってカントは「はるかに有益な方向を哲学に永続的に与えることを」(X145) 希望する、とする。かくして「私の超越論的哲学が完成したなら....それは本来、純粋理性の批判である」(ibid.) とする。つまり「この超越論的哲学が、純粋理性批判である」(XVII558,R.4455)。その後カントは「〔二つの〕形而上学にとりかかる」(X145)。それは「自然の形而上学と道徳の形而上学だけ」(ibid.) である。それから3年後のヘルツ宛の書簡(1776年11月24日付)⁽²⁵⁾で、かつてラーヴァターが「沈黙」(X149) を非難していたように「私はあらゆる方面から非難されている。しかし私は実際には数年〔沈黙十年〕これほど体系的に、しかも持続的に仕事をして来たことはない」(X198) と弁明する。そしてその仕事の完成のために、カントは「すべての経験的原理から独立に判断する理性、つまり純粋理性の領域が概観され得ることでなければならない」(X199) とする。そしてカントは「その領域のすべての範囲、区分、限界、すべての内容を確実な原理に従っ

て記述し」(ibid.)、「純粹理性の批判、訓練、基準および建築術、つまり形式の完備した学問が必要である」(ibid.)とする。この学こそ『純粹理性批判』である。このようにしてカントは、可想界での理性認識の形式的原理を確立する批判的形而上学を完成させるのである。

おわりに

そしてついにカントは「沈黙十年」の成果である金字塔を確立し、ヘルツ宛書簡(1781年5月1日付)で「純粹理性批判という標題の著作が今度の復活祭の市には刊行される」(X266)とする。しかもカントは「この著作は、かつて『可感界と可想界』という標題の下で...あらゆる多様な研究の成果を含んでいる」(X266)とする。しかしそれは、問題含みであった。次いでヘルツ宛の書簡〔草稿〕(1781年5月11日付)⁽²⁶⁾で「私の著作は評判の良し悪しはどうか、人間認識の最も重要なこの部分において〔従来の〕思考方法の全面的な変更をもたらさう」(X269)とする。そして著作に「若干の説明を付け加えたいと思うことはあっても、今でも重要問題においては、何一つ変更したいと思うようなものは見当たらない」(ibid.)と声明する。本論文は、以上のように1770年以降からカントの金字塔『純粹理性批判』への道の精神的解釈の試論である。

注

カントの著作からの引用は、アカデミー版カント全集 (Kant's gesammelte Schriften Herg.von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften,(abgek.KGS.)) に基づき、巻数をローマ数字、原著ページ数をアラビア数字にて本文中に () で示すものとする。

- (1) Kant,Immanuel:*Träume eines Geistersehers,erläutert durch Träume Metaphysik*,1766.in:KGS.Bd.II,Berlin 1912.
- (2) Kant,I.:*De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis*,1770. in: KGS. Bd.

- II, Berlin und Leipzig 1912.S.385-419.参考英文訳として、ウォルフオード(D. Walford, 1992.)を参照した。The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant.In:Theoretical philosophy,1755-1770.translated and edited by David Walford, RalfMeerbote,Cambridge University Press 1992,On the form and principles of the sensible and the intelligible world [inaugural dissertation] 1770.pp.373-416.
- (3) Kant,I.:164 [151] .Zu Marcus Herz.1.Mai.1781.*Kant's Briefwechsel*.in:KGS.Bd. X, Berlin und Leipzig 1922.S.266-267.
- (4) Kant,I.:*Kritik der reinen Vernunft*,1781.2 Aufl.1787.in:KGS.Bd.III,Berlin 1911.
- (5) Schultz,Uwe:*Immanuel Kant*.in:rowohlts monographien,Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.Reinbek bei Hamburg 1965.S.86-87.
- (6) 精神史的解釈とは、本論では人間の精神活動を歴史の面から創出する方法のことを意味する。この精神史的解釈に関連づけて、ディルタイ(W.Dilthey) はアカデミー版カント全集の第一巻に序文(1902年7月付)を寄稿して「偉大な思想家達の歴史〔的解釈〕は、彼らの体系を照し出し、人間精神史の理解にとって不可欠の基礎である」(I, VIII) とする。つまり精神史的解釈は「過去にはまだ呈示されえなかつたものの創造であり、新しい価値の明示」(Dilthey,Wilhelm:*Die geistige Welt*. in : *Gesammelte Schriften*,Bd.V,1924.S.218.)の体系を含意する、ものである。
- (7) Kant,I.:*Von dem ersten Gründe des Unterschiedes der Gegenden im Raume*,1768. in:KGS.Bd. II,Berlin 1912.
- (8) Kant,I.40 [38] :Zu Johann Gottfried Ferder.9.Mai.1768.*Kant's Briefwechsel*. in:KGS. Bd. X,Berlin und Leipzig 1922.S.73-74.
- (9) 手記断章(省察)の年代決定については、次を参照 Vgl.Adickes,Erich:*Kant-Studien*, Lipsius & Tischer,1895.S.164ff.
- (10) Malebranche,Nicolas:*De la recherche de la verité*,1674.edite par Genevieve Rodis -Lewis Librairie Philosophique J.Vrin.Paris,2 ed.1972.p.437.
- (11) Cassirer,Ernst:*Kants Leben und Lehre*, Verlag bei Bruno Cassirer,Berlin 1918. 2 Aufl.1921. S.106.
- (12) Kant,I.:*Principiorum primorum cognitionis metaphysicae nova dilucidatio*,1755.in: KGS.Bd.I,Berlin 1905.S.385-416.参考英文訳として、ウォルフオード(D.Walford, 1992.)を参照した。The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant.In: Theo-

- retical philosophy, 1755-1770.translated and edited by David Walford,Ralf Meerbote, Cambridge University Press 1992, A new elucidation of first principles of metaphysical cognition (1755),pp.1-45.
- (13) Leibniz,Gottfried Wilhelm von:*Principes de la philosophie ou Monadologie*.in: Philosophische Bibliothek,Bd.253,Felix Merner Verlag GmbH.Hamburg 1982, §80, 81. S.62-65.
- (14) Malebranche,N.:*De la recherche de la verité*,1674.Paris,1972.
- (15) Kant,I.:57 [54] .Zu Johann Heinrich Lambert.2.Sept.1770.*Kant's Briefwechsel*.in:KGS. Bd. X,Berlin und Leipzig 1922.S.96-99.
- (16) Kant,I.:67 [62] .Zu Johann Jakob Bernoulli.16.Nov.1781.*Kant's Briefwechsel*.in:KGS. Bd.X,Berlin und Leipzig 1922.S.276-279.
- (17) Kant,I.:*Von den verschiedenen Rassen der Menschen*,1775.in:KGS.Bd.II,Berlin 1912.
- (18) Kant,I.:81 [73] .Von Johann Casper Lavater.8.Febr.1774.*Kant's Briefwechsel*.in:KGS. Bd. X,Berlin und Leipzig 1922.S.148-150.
- (19) Kant,I.:67 [62] .Zu Marcus Herz.7.Juni.1771.*Kant's Briefwechsel*.in:KGS.Bd.X, Berlin und Leipzig 1922.S.121-124.
- (20) Kant,I.:63 [59] .Von Moses Mendelssohn.25.Dec.1770.*Kant's Briefwechsel*.in:KGS. Bd. X,Berlin und Leipzig 1922.S.113-116.
- (21) Kant,I.:70 [65] .Zu Marcus Herz.21.Febr.1772.*Kant's Briefwechsel*.in:KGS.Bd.X, Berlin und Leipzig 1922.S.129-135.
- (22) カントはこの著作『感性と理性の限界』計画では「理論的部門と実践的部門になると考えた」とする。第一の理論的部門は、現象学一般と形而上学の二章を含み、第二の実践的部門は、判断力批判と道徳性の第一根拠の二章を含むものである。かくして「理論的認識および知的である限りでの実践的認識の本性を含む純粹理性の批判を提示できる」(X132)とするのである。
- (23) Aristoteles:*Categoriae et leber de Interpretatione*,recognovit brevique adnotatione critica instruxit L.Minio-Paluello,Oxonii 1956.1bb20-2aa10.
- (24) Kant,I.:79 [71] .Zu Marcus Herz.gegen Ende 1773.*Kant's Briefwechsel*.in:KGS.Bd. X,Berlin und Leipzig 1922.S.143-146.
- (25) Kant,I.:112 [101] .Zu Marcus Herz.24.Nov.1776.*Kant's Briefwechsel*.in:KGS. Bd. X,

Berlin und Leipzig 1922.S.189-200.

- (26) Kant,I.:166 [153] .Zu Marcus Herz.Nach d.11.Mai 1781.*Kant's Briefwechsel*.in:KGS.
Bd. X, Berlin und Leipzig 1922.S.268-270.